

「勧誘」の定義をめぐって ——「We の形成」の観点から——

金 玉英

キーワード：行為要求、勧誘、We の形成、共同行為、誘い

要 旨

「勧誘」の定義において、従来の研究では行為者、促し用法、運用論的条件などをめぐって揺れが生じていることを指摘し、今まで重要視されてきた「話し手と聞き手による共同行為」ではなく、「話し手と聞き手による We の形成」こそ「勧誘」の定義における最も重要な概念であることを主張する。そして、「勧誘」には「We の形成」が「前提になる」ものと、それを「目指す」ものがあり、「We の形成」には共同行為による「行為者としての We」だけでなく、「潜在的・心理的な We」も含まれることを述べ、「勧誘」の定義と類型、「We の形成」との関わり方を明らかにする。

1. はじめに

「勧誘」とは何か^{*1}。一般的に用例(1)(2)のような、話し手が聞き手に話し手との共同行為を要求する表現を指すことが多い。

(1) 時間があれば、ごはんでも食べに行こう。(日本語記述文法研究会 2003 : 62)

(2) 明日、映画を見に行くんだけど、君も行かない? (同上 : 65)

*1 行為要求表現を体系的に考えた場合の「ほかの表現と区別するための」定義は別問題であり、本稿では「典型的な勧誘」の定義について述べる。

しかし、黒川 1999 でも指摘されているように*2、「勧誘」の使われ方は研究者によって様々であり、定義の範囲も異なる。例えば、下記用例(3)(4)のような行為者が聞き手のみである場合や、用例(5)のように聞き手が行為に加わることが既に決まっている場合において、先行研究では「勧誘」の判定に揺れが生じている。樋口 1992、齋 2010 は(3)(4)を「勧誘」から外し、(5)を「勧誘」として捉えているが、安達 2002、日本語記述文法研究会 2003 は逆に(3)(4)を「勧誘」と捉え、(5)を「勧誘」から外している。

(3) そんなとき私は今の監督に、うちのチームに来ないかと誘われた。

(安達 2002 : 25)

(4) 保険にお入りにになりませんか。

(川上 1995 : 99)

(5) わたしのために、みなさんお待ちせしてすみません。さあまいりましょう。

(樋口 1992 : 182)

このように、「勧誘」という用語は、その定義について厳密な議論がなされず、あいまいなまま、都合のいいように使われてきたように思われる。

本稿では、従来の研究における「勧誘」の定義を概観し、その揺れを明確にする。そして、なぜそのような揺れが生じているのかについて、話し手と聞き手による「We の形成」という観点から統一的な説明を与え、「We の形成」こそ「勧誘」の定義において最も重要な概念であることを主張する。また、「勧誘」の定義と類型、「We の形成」との関わりについても考察を行う。

2. 先行研究における「勧誘」の捉え方

「勧誘」の定義について、先行研究では主に行為者、促し用法、運用論的条件など3つの基準をめぐって揺れが生じている。

*2 黒川 1999 は、「勧誘」の定義に揺れがあるという理由からその用語を避け、「話し手聞き手二者行動要求表現」を用いている。

2.1. 行為者

「行為者」の観点から見ると、「話し手の行為」を前提とするかしないか、いい換えれば、上記用例(3)(4)のような「聞き手のみ」が行為者である場合を含めるかどうかによって意見が分かれる。

下記(6)の引用から確認できるように、樋口 1992、安達 1995、姫野 1998、孫 2009、齋 2010 などは、「話し手の行為」を前提としたものだけを「勧誘」と定義している。

(6) 「話し手の行為」を前提とする定義

- a. 「しよう」、「しましよう」というかたちを述語にもつ文は、その述語によってさししめされる動作の主体が一・二人称であるばあいには、話し手による聞き手への勧誘が表現されている。この種の文のことを、ここでは仮に勧誘文となづけておく。(樋口 1992 : 175)
- b. 話し手が行う、あるいは行っている行為への参加を聞き手に求める。(安達 1995 : 226)
- c. 勧誘とは、話し手とともに行為を遂行するよう聞き手に働きかけることを目的とする発話行為を言う。(姫野 1998 : 132)
- d. 話し手と聞き手双方の利益のために話し手が実行する予定、または実行している行為への参加を聞き手に働きかける。(孫 2009 : 55)
- e. 動作主体が一・二人称である時、シヨウを述語とする文は「勧誘」を表す。「勧誘」とは典型的には話し手と聞き手とで行う行為の実現を聞き手にうながすものである*3。(齋 2010 : 128)

仁田 1991 では「勧誘」という用語は使用していないが、「誘いかけ」について、「〈誘いかけ〉とは、聞き手に話し手と同様の行動を取るように要求する、といったものである(p.158)」 「〈誘いかけ〉とは、話し手の行為遂行を前提として、聞き手

*3 樋口 1992 は、「しよう」を述語に持つ文を動作の主体によって「意志」「勧誘」「とおまわしの命令」に分類しているが、齋 2010 は「しよう」の表す文を「意志」と「勧誘」に分け、「命令」を「勧誘」から生まれた派生的な用法として捉えている。

に行為の遂行を促し働きかけるものである(p.181)」と述べている。仁田 1991 の「誘いかけ」は、「話し手の行為」を前提とした「勧誘」と同じ意味で捉えられていることが分かる。

このような「話し手の行為」を前提とする定義では、用例(3)(4)のような「聞き手のみが行為者」である場合を「勧誘」に含んでいない。

それに対し、日本語教育学会 1982、坂本・川口・蒲谷 1994、川上 1995 などは「話し手の行為」を前提としない、つまり「聞き手のみが行為者」である場合も含めて「勧誘」と定義している。

(7) 「話し手の行為」を前提としない定義

- a. 話者が相手に対して何かをすることを勧める、あるいは、提案する表現。

(日本語教育学会 1982 : 198)

- b. 「勧誘」は、自分と相手両者が行動するものと、行動する者が相手だけの場合が考えられる。前者は相手も自分もこれから行動に移る「一緒ニシマショウ・シマセンカ」という型であり、後者には、自分はすでにその行動をしている「アナタモシマセンカ」型、自分はその行動に移らず相手だけに行動を勧める「アナタハシマセンカ」型などがある^{*4}。

(坂本・川口・蒲谷 1994 : 51)

- c. いわゆる「勧誘」は、「勧め」と「誘い」に分けることができる。「勧め」と「誘い」は、ともに「話し手が、聞き手にとって利益になるような一定の行為を、聞き手に提案しその実行を促す」という行為指示の表現である。「誘い」は話し手が聞き手とともに一定の行為を行うことを提案している。

(川上 1995 : 102-101)

また、ポリー 1993、日本語記述文法研究会 2003 は、定義上は「話し手の行為」

*4 坂本・川口・蒲谷 1994 では「A」「J」「AJ」など記号を用いて表記されているが、対応する意味「相手」「自分」「両者」に書き直してある。また、川口・蒲谷・坂本 2002 は「自分」と「相手」が一緒に行うよう持ちかける」ものを「誘い」と呼んでいる。

を前提としながら「聞き手のみ」が行為者である場合を「勧誘」に含めている。

(8)「話し手の行為」を前提としながら、「聞き手のみ」が行為者である場合を含む捉え方

- a. 「勧誘」とは、相手の気持ちを動かして、ある行動をともにすることである。つまり、一緒にどこかへ行ったり、何かをしったりする場合や、セールののように、行為相手にある行為をさせる場合等が含まれる。

(ポリー 1993 : 2)

- b. 勧誘のモダリティとは、話し手の行為を前提として、聞き手に行為の実行を誘いかけることを表すものである。(中略)「しないか」は、話し手が存在している場所や所属している組織に聞き手を誘いかけることもできる。そのような文では、話し手の行為は含意にとどまっている。「しないか」はあくまでも聞き手がその行為を実現させるかどうかを質問することで勧誘の解釈を得るものであり、話し手の行為は発話状況において含意されていけばよい。(日本語記述文法研究会 2003 : 61、65)

そのほか、安達 2002 は、一般に勧誘という機能は、話し手と聞き手を行為者とするという特徴と結びつけられると述べた上で、用例(3)を挙げ、「行為者としては聞き手だけが指定されていると考えられるにも関わらず、勧誘と呼びたくなる例がある」とし、「行為者という概念を幅広く捉えた方が都合がいいように思われる」と主張している(pp.24-25)。

2.2. 促し用法

「促し用法」とは、上記用例(5)のような、話し手が実行しようとしている行為に聞き手が加わることが既に決まっているものを指す。具体的には動作遂行の促し、動作を始めるきっかけ的なものがある。この用法について、従来の研究では聞き手を行為に引き込む意味合いが弱いとされ、「勧誘」に含めるかどうかをめぐる異論が生じている。

樋口 1992 は、「勧誘」の定義において「動作の主体」つまり「行為者」には注目しているが、「引き込む意味合いの強さ」についてはあまり注目していない。「し

よう」を述語にもつ文において、「話し手と聞き手」が行為者となる場合は「勧誘」を表すとし、「話し手が自分の行動のなかに聞き手をひきいれようとするもの」から、「ただ動作の遂行をうながしているにすぎないもの」、「動作を始めるきっかけ的なもの」まで全て「勧誘」と捉えている。つまり、聞き手を行為に引き込む意味合いの強さを「勧誘」の定義における問題とせず、「促し用法」を積極的に「勧誘」に含めている。

齋 2010 も、「「勧誘」の中には、その行為をするよう誘いかけ、働きかける力が強く感じられるものと、そうでないものがある(p.128)」と述べ、「引き込む意味合いの強さ」による定義は行っていない。

それに対し、安達 2002、日本語記述文法研究会 2003 は、聞き手を行為に引き込む意味合いの「強い」ものだけを「勧誘」とし、「促し用法」を「勧誘」から外している。

安達 2002 は、「しよう」が聞き手を行為者に取り込む複数の行為者の行為を表すものを「促し」「提案」「引き込み」の3つのタイプに分けている。そして、「〈促し〉は、話し手が実行しようとしている行為に聞き手が加わることがすでに決まっているものである。その意味で、聞き手を行為に引き込もうとする力は強くなく、勧誘的な解釈は出てきにくい(p.25)」と述べ、「行為の実行が発話に先立って決定していると想定される点に勧誘的な機能との違いがある(p.26)」と主張している。「促し用法」を「勧誘」と区別して捉えていることが確認できる。

また、日本語記述文法研究会 2003 も、「勧誘」は話し手が行おうとしている行為に聞き手を引き込もうとするものであり、「促し」はすでに実行することが決まっている行為に対して、行為を開始するきっかけを与えるものであると定義し、「促し」と「勧誘」を区別している(pp.43-44)。

それ以外の先行研究はこの問題について特に明確に言及していないが、「〈誘いかけ〉は、「サア、行キマショウ。」のように「ショウ」の形でも表される(仁田 1991 : 159)」や、「考えすぎだつて。サ、行こッ(安達 1995 : 232)」のような記述から、仁田 1991、安達 1995 は「促し用法」を「勧誘」に含めていることが伺える。

2.3. 運用論的条件

「勧誘」の定義において、運用論的条件の必要性を主張した研究に安達 2002 が

ある。安達 2002 は「しよう」の機能について、「話し手と聞き手が行為者となるだけでは勧誘という解釈にはならないと考える(p.24)」と述べ、次のように結論づけている。

- (9) 勧誘は話し手と聞き手が行為者になるという特徴づけだけでは十分に捉えられない。複数的な行為者をとる〈提案〉と〈引き込み〉がさまざまな運用論的条件を満たしたときに派生される解釈として位置づけられる。

(安達 2002 : 40)

そして、「提案」の「しよう」は勧誘的な解釈を強くもつものと、そのような解釈が感じられないものに分けられるとし、「勧誘」の解釈を強める運用論的条件として(10)を挙げている。なお、安達 2002 でいう「提案」は「話し手と聞き手が行為者となる行為の実行を聞き手に持ちかけようとするもの」を指す。

(10) 「勧誘」の運用論的条件

- a. 話し手と聞き手によって行われる行為がそれぞれ独立していること
- b. 行為が共同的なものであること
- c. 行為者が特定できるものであること

(安達 2002 : 27-29)

つまり、安達 2002 は、下記用例(11)～(13)のような運用論的条件 (10) を満たさないものを、「勧誘」の解釈を持たない「提案」と捉えている。

(11) 瀬名「結婚しよう」

南 「……えっ？」

瀬名 「……一緒にボストンに行こう」

南 「休暇が終わったら、私はいらないんじゃないの？」

(安達 2002 : 27)

(12) 「……一緒に寝てくれるの」

「勿論よ。ね、今夜は早いとこ、横になっちゃおうね」

（安達 2002：28）

- (13) 稔は呆れ、「電話して、本を引き取りに来いって行ってやろうよ」と提案したが、イワさんには別の考えがあった。その日のうちに、店先に貼り紙を出したのである。

（安達 2002：28）

具体的に述べると、(11)は「結婚する」が共同行為者を必要とする行為であり、その行為の性質上、自分の行為に引き込もうとする勧誘的な解釈が出てこないとしている。(12)については、「横になる（寝る）」行為を提案しているが、行為の実行に関して話し手と聞き手は何らの関わりももたない、つまり「共同的なもの」でないため「勧誘」とは考えにくいと論じている。そして、(13)については、「来いという」行為の行為者が不明確であり、明確に話し手と聞き手を行為者とするとは考えにくいと述べ、このような時、勧誘的な解釈は薄れ、「提案」の機能が前面に出てくると主張している。

以上、先行研究における「勧誘」の捉え方の揺れを、3つの基準に沿って整理した。その内容を【表1】にまとめる。

【表1】先行研究における「勧誘」の捉え方

先行研究	行為者が 聞き手のみの場合	促し用法	運用論的条件
安達1995、姫野1998、孫2009	×	—	—
日本語教育学会1982、ポリー1993、坂本・川口・蒲谷1994、川上1995	○	—	—
樋口1992、齋2010	×	○	—
日本語記述文法研究会2003	○	×	—
安達2002	○	×	必要

それでは、なぜ研究者によってこのような揺れが生じるのだろうか。行為者、促し用法、運用論的条件はどのように捉えるべきだろうか。以下では、次のような枠組で説明を与える。

3. 「We の形成」の観点から

本節では、「話し手と聞き手による共同行為」ではなく、「話し手と聞き手による We の形成」こそ「勧誘」における最も重要な概念であることを論じる。「We の形成」には「行為者としての We」だけでなく、「潜在的・心理的な We」も含まれる。

3.1. 行為者をどう捉えるか

従来の研究において「勧誘」は、「話し手が行為者に含まれるかどうか」という「行為者」の基準が重要視されている。話し手が行為者に含まれる「話し手と聞き手の共同行為」の場合、「勧誘」として扱うことには先行研究においても一致した見解を示しており、まったく異論がない。問題になるのは、行為者が「聞き手のみ」の場合をどう捉えるかである。積極的に「勧誘」の定義から外すもの(6)と、定義に含めるもの(7)、定義上は含めないが「勧誘」として捉えるもの(8)など、先行研究における揺れは大きい。

それでは、行為者が「聞き手のみ」の場合をどう捉えるべきだろうか。

話し手が行為者に含まれていない下記の用例(14)(15)をみると、安達(2002: 25)にも述べられているように「勧誘」と呼びたくなる例である。というより、日常で言われる「勧誘」は、(15)のような「セールス勧誘」を指すことがむしろ一般的である。直感的にもこれらを「勧誘」に含めない方が違和感を感じる。

(14) そんなとき私は今の監督に、うちのチームに来ないかと誘われた。(再掲(3))

(15) 保険にお入りになりませんか。(再掲(4))

但し、その説明に当たって、安達 2002 は「行為者という概念を幅広く捉えた方が都合がいいように思われる」と主張しており、日本語記述文法研究会 2003 は「話し手の行為は発話状況において含意されている」と解釈している。どちらも「行為者」という概念を用いて説明を与えようとしているが、どうしても無理があるように思われる。なぜなら、用例(14)において話し手である監督は「チーム」と関わりはあるものの、「チームにくる」という行為を実行したとは考えにくい。また、(15)

においても話し手は保険の勧誘者として「保険に入る」と関わりはあるものの、行為者として「保険に入る」行為を実行したかどうかは不明である。このように、「行為者」の観点からは文法上共同行為でない(14) (15)のようなものを「勧誘」として捉えなくなる理由について十分な説明を与えることができない。

そこで、本稿では「We の形成」という概念を提案する。

(14) (15)において、話し手が行為者に含まれていないにも関わらず、何の違和感もなく「勧誘」として捉えなくなるのは、「話し手と聞き手による We が形成される」からであると考えられる。(14)においては「チームの監督」と「チームのメンバー」、(15)においては「保険の勧誘者」と「被保険者」として、「チーム」、「保険」をめぐって話し手と聞き手の間に「潜在的・心理的な We」が形成される。

つまり、「勧誘」の定義において重要なのは「行為者」ではなく、話し手と聞き手による「We の形成」である。(1) (2)のような、話し手が行為者に含まれる場合は「行為者としての We」が形成され、(14) (15)のような話し手が行為者に含まれない場合は、「潜在的・心理的な We」が形成される。行為者が「聞き手のみ」で「潜在的・心理的な We」が形成されない場合は、「勧誘」ではなく、「勧め」のようなほかの機能が前面に出てくる。

(16) [電話で]私、今、三宮にいるんだけど、出てこない？ （高梨 2011：4）

(17) [服売り場で]このジャケット、あなたに似合いそうよ。着てみない？ (同上)

上記用例(16)は、聞き手が「出てくる」という行為を実行することで、話し手と一緒に「三宮にいる」ことになり、潜在的に We が形成される。ところが、(17)は聞き手が「(ジャケットを)着てみる」行為を実行しても話し手とまったく関わりがないため、We が形成されにくい。高梨 2011 は(16)を「勧誘」と「勧め」の中間的存在、(17)を「勧め」と捉えているが、「We の形成」から分かるように(16)は「勧誘」と捉えたほうがよい。

日本語記述文法研究会 2003 など、「しないか」における、話し手が存在している場所や所属している組織に聞き手を誘いかける文を「勧誘」に含めているのも、「話し手の行為が含意にとどまる」からではない。「話し手が存在している場所」「話し手が所属している組織」に聞き手を誘うことによって、「同じ場所にいる」

「同じ組織に属する」ことになり、それによって話し手と聞き手の間に「潜在的・心理的な We」が形成されるためである。

以上より分かるように、聞き手に対する行為要求表現の一つである「勧誘」の定義において、重要なのは「行為者」ではなく、話し手と聞き手による「We の形成」である。「行為者」をめぐって「勧誘」の定義に揺れが生じていることから「話し手と聞き手による共同行為」が「勧誘」の典型条件ではないことが分かる。「話し手と聞き手による We の形成」ことこそ、「勧誘」になるための最も重要な条件である。

「行為者」「We の形成」「勧誘」の関わり方を表にまとめると、【表 2】のようになる。「行為者」に話し手が含まれる場合は「行為者としての We」が形成されるため「勧誘」の意味になり、「行為者」に話し手が含まれない聞き手単独の行為の場合は、「潜在的・心理的な We」が形成されれば「勧誘」、そうでない場合は「勧誘」にはならない。

【表 2】行為者・We の形成・勧誘との関わり

行為者	話し手+聞き手	行為者としてのWeが形成される	+ 勧誘
	聞き手のみ	潜在的・心理的なWeが形成される	
		Weが形成されない	- 勧誘

3.2. 「促し用法」を含むか否か

安達 2002、日本語記述文法研究会 2003 は、いわゆる「聞き手を行為に引き込もうとする意味合いの強いもの」を「勧誘」として捉え、聞き手が行為を実行することが既に決まっている場合は、聞き手を引き込もうとする意味合いが弱いため、「勧誘」ではなく「促し」とであると述べている。つまり、「引き込む意味合いの強さ」を「勧誘」になるための条件として扱っている。

例えば、下記用例(18)～(20)は、聞き手が「行く」「出かける」「始める」の行為を実行することが「発話以前」に既に決まっており、引き込む意味合いが弱い場合、
「勧誘」ではなく「促し」とであると主張している。

(18) わたしのために、みなさんお待たせしてすみません。さあまいりましょう。

(再掲(5))

(19) さあ、準備もできたし、出かけようか。 （日本語記述文法研究会 2003：44）

(20) 「さあ、始めましょう。どこからかかったらいいと思う？」

深呼吸を一つし、加代ちゃんは言った。ハンドルをしっかりと握る。

(安達 2002：26)

しかし、「引き込む意味合い」の強さは齋 2010 にも述べられているように、場面、文脈に依存し、そこから生まれる二次的な意味である。「勧誘」の定義と直接関わるものではない。安達 2002 も「促し」と「勧誘」を区別しながら用例(21)を挙げ、終助詞「よ」や「ぜ」が付加されると「促し」の例とすべきかどうか微妙であると論じている(p.26)。それは、「よ」や「ぜ」が付加されることによって、いわゆる聞き手を引き込もうとする意味合いが強くなるからである。

(21) 「おにいさん、早く教会に行きましょうよ」

「教会って、何さ」

(安達 2002：26)

それでは、なぜ「聞き手が行為を実行することが発話以前に既に決まっている」にも関わらず、終助詞「よ」や「ぜ」が付加されると聞き手を引き込もうとする意味合いが強くなるのだろうか。

それは、「聞き手が行為を実行することが既に決まっているかどうか」の合意有無の判断が「行為の捉え方」によって異なるためである。安達 2002、日本語記述文法研究会 2003 は「単なる述語動詞」の表す意味を行為として捉えているが、述語動詞だけでなく、それを含めた「動詞文全体」の表す意味を行為と捉えた場合、合意有無の判定結果も異なってくる。

例えば、上記用例(18)～(20)の場合、「行く」「出かける」「始める」のような「単なる述語」の表す意味を行為と捉えた場合には、行為を実行することが「発話以前」に決まっていること（合意済み）になるが、「動詞文全体」の表す意味を行為と捉えた場合には、「(いつ) 行く」「(いつ) 出かける」「(いつ) 始める」のように、「い

つその行為を実行するか」が発話以前に決まったことにはならない。「発話時」において初めて「(今) 行く」「(今) 出かける」「(今) 始める」という行為を聞き手に働きかけ、合意を求めることになる。(21)も同様、「おにいさんと一緒に教会に行く」ことが「発話以前」に決まったとしても、「(今) 早く行く」ことは「発話以前」ではなく「発話時」において初めて決まる(合意される)ものである。安達 2002、日本語記述文法研究会 2003 は、「単なる述語動詞」の表す意味を行為として捉えたため、「勧誘」の中から「促し」を特別に切り分けるという繁雑な扱いが生じている。「単なる述語動詞」ではなく「動詞文全体」の表す意味を行為と捉えた方が妥当であろう。

以上より、「促し」というカテゴリーは「勧誘」の定義において特に意味を持たず、わざわざ「勧誘」から外す理由はないということが分かる。「勧誘」の定義において重要なのは「引き込む意味合いの強さ」ではなく、3.1 節で述べたように、聞き手が話し手の仲間に入っているかどうか、つまり話し手と聞き手の間に「We」が形成されるかどうかである。この観点からみても、「促し」は「行為者としての We」が形成されることになるため、「勧誘」として捉えた方が妥当である。

3.3. 安達2002における運用論的条件

安達 2002 は、動詞の意志形「しよう」が「勧誘」を表す条件として「話し手と聞き手が行為者となる」こと以外に、下記のような「運用論的条件」を主張している。この条件を満たさない場合は、「提案」の意味を表し、「勧誘」的な解釈にはならないと述べている。

(22) 「勧誘」の運用論的条件

- a. 話し手と聞き手によって行われる行為がそれぞれ独立していること
- b. 行為が共同的なものであること
- c. 行為者が特定できるものであること (再掲(10))

本稿では、「We の形成」の観点から、動詞の意志形「しよう」が「話し手と聞き手が行為者となる」場合、上記の運用論的条件に関わらず全て「勧誘」として捉えた方が妥当であると考え。その理由を以下に示す。

まず、「(22a) 話し手と聞き手によって行われる行為がそれぞれ独立していること」についてであるが、「行く」「食べる」のように行為が独立しようと、「結婚する」「会う」のように共同行為者を必要としようと、聞き手を引き込んで「We」を形成する意味合いによる差は感じられない。違いを述べるとしたら、「We の形成」と「行為の成立」が分離できるかどうかだけである。「行く」「食べる」のように、行為が独立している場合は、「We」が形成されなくても行為は成立可能であるのに対して、「結婚する」「会う」のような共同行為者が必要な場合には分離できず、「行為の成立」と「We の形成」が同時に成り立つ。これは、4 節で述べる「勧誘の類型」と関わりはあるものの、「勧誘」として捉えることには間違いない。

次に、「(22b) 行為が共同的なものであること」についてであるが、「話し手と聞き手が行為者」となり、述語の文末形式が「しよう」である以上、話し手と何の関わりもない、単なる聞き手への行為実行の持ちかけにはならない。これは、「しよう」の基本的な意味によって決まるものである。「しよう」は「話し手の意志」を表すのが基本的な意味であり*5、「聞き手」が加わることによって「擬似的共同意志決定」を表す「勧誘」の意味に拡張していく。そのため、文脈によって「勧誘」の意味合いの強さに差はあるものの、常に行為者として共同性を持っている。用例(12)をみても、安達 2002 は「横になる（寝る）」という行為の実行に関して話し手と聞き手が何の関わりも持たないと述べているが、実はそうではない。話し手が聞き手に対して働きかけるのは、動詞文全体の表す「（一緒に）早いとこ、横になる」ことであり、「一緒に」が共起できることから分かるように、行為者としての「共同性」を持っている。従って、(22b) も「勧誘」の定義において有効な条件とはいえない。

*5 「しよう」の基本的意味が「意志」か「勧誘」かについては、先行研究において異論があり、詳しくは齋 2010 を参照されたい。但し、本稿では「しよう」を述語に持つ文において、「話し手」が常に何らかの形で関与しており、完全に切り離すことができないという理由から、話し手の「意志」を表すことを「しよう」の基本的な意味として捉える。行為者が「聞き手のみ」の場合「命令」の意味が柔らかくなるのも、話し手が何らかの形で関与しているためであり、聞き手との間に「We」が形成されているからだと考えられる。

最後に、「(22c)行為者が特定できるものであること」も同様である。安達 2002 では行為者を特定できない場合、明確に話し手と聞き手を行為者とするとは考えにくく、その場合「提案」の機能が前面に出てくると主張しているが、これは話し手と聞き手が行為者として「融合」され则认为ることができる。上記用例(13)の場合、「電話して、本を引き取りに來いっていつてやる」行為をするのは「話し手」でも「聞き手」でもよいが、誰がその行為を実行するであろうと「話し手と聞き手の共同意志」を表すことになる。「共同意志」「融合された行為」は「We の形成」を意味する。

つまり、「勧誘」の定義において最終的に重要なのは「行為者」でも「引き込む意味合いの強さ」でもなく、「We の形成」である。既に確認したように、「しないか」においても「行為者」が「聞き手のみ」の場合「潜在的・心理的な We」が形成されれば「勧誘」の意味が前面に出てくる。「しよう」においても、「話し手と聞き手が行為者となる」場合、「話し手と聞き手によって行われる行為がそれぞれ独立していない」、「行為が共同的なものでない」、また「行為者が特定できない」としても、それは「行為者としての話し手と聞き手」の概念が抽象化し、拡張した用法であると考えられる(齋 2010 : 130)。「話し手と聞き手による We」が形成される以上、「勧誘」として捉えた方が妥当である。直観的にも「しよう」を「提案」と言うことに違和感がある。従って、安達 2002 の運用論的条件(22)は「勧誘」の定義において特に意味を持たず、「共同行為」に関する「提案」は全て「勧誘」と捉えるべきである。

4. 勧誘の類型と「We の形成」

本節では、先行研究における勧誘の二つの類型を示し、それが「We の形成」とどう関わっているのかについて論じる。

4.1. 勧誘の二つの類型

安達 1995・2002、日本語記述文法研究会 2003 は、「勧誘」について「グループ型」と「引き込み型」の二つのタイプの存在を示している。

①「グループ型」の勧誘

話し手と聞き手が1つのグループとして共同して行う行為の実行を聞き手に提案することによって、聞き手をその行為に誘うものである（日本語記述文法研究会 2003：63）。

(23) [電車で空席を見つけて] あ、ここ空いているよ。座ろう。 (同上)

②「引き込み型」の勧誘

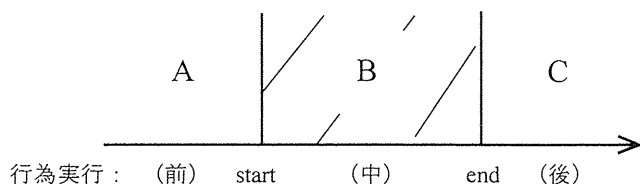
話し手が実行している、あるいは実行しようとしている行為に聞き手を引き込もうとするものである。このタイプでは、動作主である聞き手を「も」で示すことで、話し手の行為に聞き手を引き込もうとしていることを明示することができる（日本語記述文法研究会 2003：63）。

(24) 僕はもう帰るよ。君もいっしょに帰ろう。 (同上)

4.2. 「We の形成」との関わり

3 節で述べたように、「We の形成」には「行為者としての We」と「潜在的・心理的な We」がある。「行為者」に話し手が含まれる場合は「行為者としての We」が形成され、話し手が含まれない聞き手単独の行為の場合は「潜在的・心理的な We」が形成される。上記の勧誘の二つの類型は、話し手の行為を前提とした定義に基づいているため、「行為者としての We の形成」と関わりを持つ。以下では、「行為者としての We の形成」の観点から勧誘の類型について説明を講じる。

話し手と聞き手が関わる行為実行のプロセスにおいて、「行為者としての We」が形成されるパターンには、「A 実行前」「B 実行時」「C 実行後」の三つが考えられる。図で示すと、次の【図1】のようになる。



【図1】 行為実行における We の形成パターン

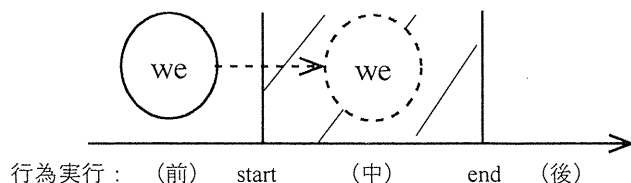
「勧誘」という行為要求表現に限っていえば、聞き手は常に行為実行の前 (A) にいるため、問題になるのは話し手の位置である。発話時における話し手の位置によって「We の形成」箇所が決まる。

まず、話し手が行為実行の前 (A) にいる場合、二つのタイプが考えられる。

一つは、話し手がまだ行為を実行しておらず、「話し手と聞き手との共同行為」を前提に聞き手に行為実行を誘いかける場合である。この場合、【図2】で示すように「行為者としての We の形成」は行為を誘いかける「前提」となる。これは、「話し手と聞き手が1つのグループとして共同して行う行為の実行を聞き手に提案する」意味と同じであり、「グループ型」勧誘に当たる。

(25) 時間があれば、ごはんでも食べに行こう。

(再掲(1))



【図2】 グループ型

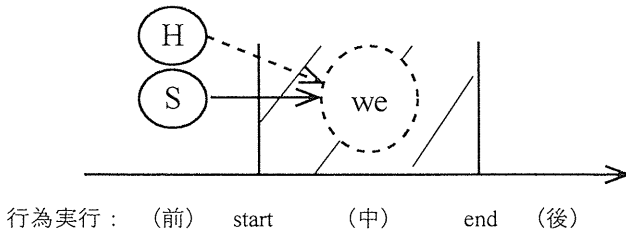
先行研究で主張する、行為に聞き手が加わるのが既に決まっているとされる「促し用法」や、運用論的条件 (22c) に反する「行為者が特定できないもの」は「グループ型」勧誘になる。

もう一つのタイプは、話し手がまだ行為を実行していないが、行為実行の意志がすでに決まっている場合である。これは、下記【図3】で示すように、話し手が

聞き手に行為実行を誘いかけ、「聞き手との共同行為」、つまり、行為実行時における「行為者としての We の形成」を目指すものである。勧誘の類型から言えば、実行しようとしている行為に聞き手を引き込もうとする「引き込み型」勧誘に対応する。

(26) 明日、映画を見に行くんだけど、君も行かない？

（再掲(2)）



【図3】 引き込み型①

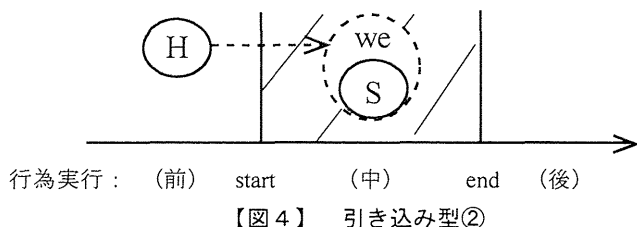
図2と図3で示す「グループ型」勧誘と「引き込み型①」勧誘は、「結婚する」のような運用論的条件(22a)に反し、話し手と聞き手によって行われる行為がそれぞれ独立せず「共同行為者を必要とする」場合、意味的に差異が生ずる。「(私たち)結婚しよう」のような「グループ型」の場合は、話し手と聞き手が「共同行為者」になるが、「あなたもそろそろ結婚しよう」のように「引き込み型①」の場合は「共同行為者」として話し手と聞き手以外の第三者が必ず必要となる。

話し手が「行為実行中」の場合も、「引き込み型①」と同様、聞き手に行為実行を誘いかけることによって「聞き手との共同行為」、つまり行為実行時における「行為者としての We の形成」を目指すものである。但し、「継続性のある行為」という制約がある点で「引き込み型①」と異なる。【図4】に示しておく。

(27) リカ「あーあー、そんな飲んじゃって」

三上「座れよ、一緒に飲もうぜ」

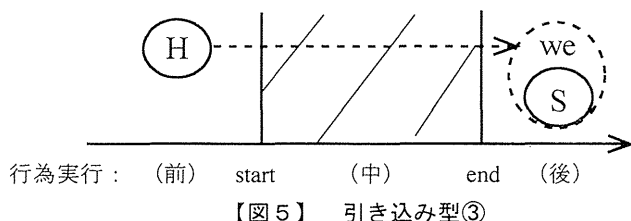
（安達 2002：30）



それに対し、話し手が既に「行為実行済み」の場合は、【図 5】に示すように「We の形成」が「行為実行後」になる。「共同行為の時間共有の有無」の観点から見ると、「引き込み型①②」との差異が分かる。「引き込み型①②」は聞き手との「時間を共有した共同行為」を目指しているが、「引き込み型③」は「時間のズレた共同行為」を目指すことになる。

(28) [座っている席の隣を指さして]よかったら、座りませんか？

(日本語記述文法研究会 2003 : 65)



以上、「行為者としての We の形成」の観点から、勧誘の二つの類型に説明を与え、その差異について触れた。二つの類型を再定義すると、「We の形成」が聞き手に行為実行を誘いかける「前提になる」のが「グループ型」勧誘、「We の形成」を「目指す」のが「引き込み型」勧誘である。なお、話し手が行為者に含まれない聞き手単独の行為の場合は、「潜在的・心理的な We」の形成を「目指す」ことになる。その関係を以下の【表 3】にまとめる。

【表 3】勧誘・We の形成・勧誘の種類の関わり

Weの形成	行為者としてのWe	グループ型	「Weの形成」が「前提」になる	勧誘
		引き込み型		
	潜在的・心理的なWe	—	「Weの形成」を「目指す」	

5. おわりに

本稿では、「We の形成」という観点から、「勧誘」の定義及び類型との関わりについて考察を行った。以下、その内容をまとめる。

- ① 「勧誘」の定義において、従来の研究では行為者、促し用法、運用論的条件などをめぐって揺れが生じている。→[2 節]
- ② 従来は「行為者」という概念が重要視されてきたが、「行為者」ではなく「話し手と聞き手による We の形成」こそ「勧誘」の定義における最も重要な概念である。「We の形成」には「行為者としての We」と「潜在的・心理的な We」が含まれる。→[3 節]
- ③ 「勧誘」には「We の形成」が「前提になる」ものと「We の形成」を「目指す」ものがある。「行為者としての We の形成」が「前提になる」ものが「グループ型」勧誘、「目指す」ものが「引き込み型」勧誘になる。また、「引き込み型」勧誘は「We の形成パターン」が更に三つに分かれる。行為者が聞き手のみの勧誘は、「潜在的・心理的な We の形成」を「目指す」ものに属する。→[4 節]

参考文献

- 安達太郎(1995)「シナイカとシヨウとシヨウカー勧誘文」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版
- 安達太郎(2002)「意志・勧誘のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 川上恭子(1995)「勧誘表現「～シナイカ」の表現性」『園田国文』16 園田学園女子大学
- 川上徳明(2002)「命令・勧誘表現の四段型体系」『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』10 札幌大学文化学部
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵(2002)「待遇表現としての「誘い」」『早稲田大学日本語教育研究』1 早稲田大学
- 黒川美紀子(1999)「話し手聞き手二者行動要求表現～いわゆる「勧誘表現」について～」『早稲田日本語研究』7 早稲田大学国語学会
- 齋美智子(2010)「シヨウに関する一考察」『日本語形態の諸問題—鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房
- 坂本恵・川口義一・蒲谷宏(1994)「「行動展開表現」について—待遇表現教育のための基礎的考察—」『日本語教育』82 日本語教育学会
- 孫 楊(2009)「勧誘表現における日本語母語話者と中国人日本語学習者のストラテジーの違い--「～しないか」と「～しようか」を中心に」『人間文化』25 神戸学院大学人文学会
- 高梨信乃(2011)「行為要求について—日本語教育における問題—」『神戸大学留学生センター紀要』17
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語教育学会(1982)『日本語教育事典』大修館書店
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 樋口文彦(1992)「勧誘文—しよう、しまし—」言語学研究会(編)『ことばの科学5』むぎ書房
- 姫野伴子(1997)「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』33(1) 埼玉大学教養学部

姫野伴子(1998)「勧誘表現の位置—「しよう」「しようか」「しないか」—」『日本語教育』96 日本語教育学会

姫野伴子(2009)「行為指示型表現に対する母語話者と学習者の適切性判断」『明治大学国際日本学研究』

ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語研究叢書5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版

山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版

[付記]本稿は、2011年11月5日北京大学で行われた「北京大学・中国人民大学・筑波大学三大学合同フォーラム」における口頭発表の一部内容を加筆・修正したものである。ご指導くださった橋本修先生・矢澤真人先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。

キン ギョクエイ／人文社会科学研究科
(2012年10月31日 受理)